



つなぐちゃんベクトル

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会社内誌 臨時増刊 334号 2011.4.12 発行 社会政策研究所

厚生労働省：東日本大震災に伴う障害福祉サービスの提供等の取扱いについて

(2011年4月8日)

東日本大震災に関連し、以下のような障害福祉サービスに係る弾力的措置が行われていますので、ご参考にしてください。詳しくは各県に相談してください。

※ 各事務連絡、通知は、厚生労働省ホームページからご覧いただくことができます。

(サービスの提供について)

- 1 被災者等を受け入れたときなどに、一時的に、定員を超える場合を含め人員配置基準や施設設備基準を満たさない場合も報酬の減額等を行わないこととしています。(3月11日事務連絡、3月24日事務連絡(別添1 Q&A))
- 2 やむを得ない理由により、利用者の避難先等において、安否確認や相談支援等のできる限りの支援の提供を行った場合は、これまでのサービスとして報酬の対象とすることができます。(4月6日事務連絡(障害保健福祉部障害福祉課分))
- 3 避難所においてホームヘルプサービスを提供した場合も報酬の対象となります。(3月11日事務連絡、3月24日事務連絡(別添1 Q&A))
- 4 利用者とともに仮設の施設や他の施設等に避難し、そこにおいてサービスを提供した場合も報酬の対象にすることができます。
※ 避難先の施設で費用がかかった場合には、避難をした事業者から避難先の事業者を支払ってください。(3月24日事務連絡(別添1 Q&A))

(利用者への対応について)

- 1 震災後に利用者の受けている支給決定の有効期間が切れていたとしても、サービスを提供できます。(3月24日事務連絡)
※ 特別措置法により、支給決定の有効期間が3月11日～8月30日までに切れる場合は、これを8月31日まで延長することとされています。
- 2 利用者が受給者証を持っていなくても、サービスを提供できます。(3月24日事務連絡)
- 3 震災等により利用者負担の支払が困難な方については、利用者負担の徴収の猶予や減免を行うことができます。(3月24日事務連絡)

(報酬の請求について)

- 1 震災等によりサービス提供記録を滅失等した場合や、サービスの提供内容を十分に把握することが困難な場合は、概算による請求を行う旨を国保連に届け出ることができます。
(この場合、報酬の支払はこれまでの実績により算出した額が支払われます。)(4月6日事務連絡(障害保健福祉部企画課分))
- 2 1の届出を含めた報酬の請求期限が、4月13日(通常は4月10日)に延期されました。(4月6日事務連絡(障害保健福祉部企画課分))
※ 提出期限に遅れても翌月以降に提出することが可能です。また、4月分及び5月分の取扱いについては、別途、ご連絡いたします。
- 3 一時的に報酬の支払いが中断した場合には、福祉医療機構による経営資金の貸付が受けられる場合があります。
※ この件に関する問い合わせ先 独立行政法人福祉医療機構福祉貸付部福祉審査課
TEL 0120-3438-62 Fax 0120-3438-62

(介護職員等の派遣、避難者の受入等)

- 1 各事業所等において、介護職員等が不足している場合には、国や県などの調整を受けて、別の事業所等より介護職員等の派遣を受けることができます。(3月18日事務連絡(介護職員等の派遣要望))
- 2 被災等により利用者を避難させたい場合には、国や県などの調整を受けて、受入施設を確保することができます。(3月18日事務連絡(要援護者の受入要望))

(福祉避難所について)

- 1 事業所や施設が福祉避難所の指定を受けて利用者等に対して支援を行うことも考えられます。福祉避難所は原則として10:1の職員配置とされていますが、特別基準として職員配置の上乗せを認められる場合もありますので、都道府県等と相談してください。ただし、同一サービスにつき、障害者自立支援法による報酬と福祉避難所に係る支弁の両方を得ることはできません。(3月11日通知、3月19日福祉避難所通知、3月19日福祉避難所通知(その2))

(雇用調整助成金等について)

- 1 震災等により、事業主が従業員を一時的に休業などさせた場合、休業手当相当額の一部(中小企業で原則8割)を助成する雇用調整助成金制度が利用できます。
- 2 震災等により、事業所が休止・廃止したために休業を余儀なくされ、賃金を受けとれない状態にある方は、実際に離職していなくても失業給付が受給できることとなっています。

阪神・淡路の経験糧に 宮城で兵庫のボランティア

神戸新聞 2011年4月11日

被災地では避難生活が1カ月に及び、被災者の体調や心理面のケアが求められている。避難所では、16年前の阪神・淡路大震災を機に立ち上がった兵庫県の各ボランティア団体が、経験を生かした生活支援をしている。

NPO法人「阪神高齢者・障害者支援ネットワーク」(神戸市西区)は、宮城県気仙沼市の面瀬中学校を拠点に、高齢者や障害者の健康チェックを24時間態勢で続ける。10日に現地入りした黒田裕子理事長は「被災者を孤立させず、安心して生活してもらうことが大事。1年間は見守っていきたい」と話す。

地震の10日後、気仙沼市の小泉中学校に入り、仮設シャワー室を設置したNPO法人「ひまわりの夢企画」(神戸市垂水区)。泊まり込みで活動する荒井勲代表は、「阪神・淡路の経験から何に困っているか分かる」と洗濯機を持ち込んだ。

神戸市内のボランティア団体でつくる「チーム神戸」の金田真須美代表は、石巻市の湊小学校で高齢者の見守りや子どもの遊び相手を担う。「避難者はかなり疲れている。ボランティアも足りない。どんどん来て」と呼びかけている。(本紙取材班・岸本達也、岩崎昂志)

ふんばる 3. 11大震災／試練、みんなで越える

河北新報 2011年4月10日



福祉避難所で、父房寿さん(左)、次男悟さん(右)をカブける寿さん=2日、仙台市宮城野区

◎災害弱者抱え試行錯誤

障害ある家族支える嶋田寿さん(58)＝仙台市

「おやじや悟たちは、いつまでここにいられるのだろうか」。仙台市宮城野区蒲生の嶋田寿さん(58)は、先の見えない日々不安を募らせている。

自宅で同居していた父房寿さん(90)、妻雅子さん(56)、次男悟さん(32)の

3人が、障害者向けの「福祉避難所」に指定された同区大槻の区の障害者施設にいる。

悟さんは水頭症で3歳ごろから知的な発達が止まり、脳性まひで手足が不自由だ。房寿さんは2年前からアルツハイマーの症状が表れている。

嶋田さんは電気料金徴収の仕事をしながら、2人を日中、施設に預け、雅子さんと共働きをしてきた。が、雅子さんも昨年11月、脳梗塞で倒れた。左半身まひなどの障害が残り、職場復帰を目指してのリハビリを支えるさなか、3月11日の震災が起きた。

福祉避難所では、職員やヘルパーが24時間、被災者を見守ってくれる。「車椅子や手すり付きトイレなど設備も整っていて、安心した」と嶋田さん。しかし、ここは一時の避難所ではない。

自宅のある蒲生地区は海岸に近く、地震後、津波が襲来した。房寿さんと悟さんはそれぞれ離れた施設で無事だった。家にいた雅子さんは地震の後、車で近くの小学校に避難し、大津波警報でさらに高台に逃れた。」

市中心部にいた嶋田さんは、自分の車で施設を巡って父と次男を乗せ、被災を免れた同区中野の長男浩さん(34)一家のアパートへ避難した。翌12日になって、雅子さんも自力でたどり着いた。

嶋田さんらはそのままアパートに身を寄せた。しかし、障害のある家族には慣れない環境だった。

「トイレや階段に手すりやスロープがなく、体重80キロの悟を介助するのは一苦労だった。悟も日ごと表情をなくしていった」。高齢の房寿さんも停電で暖房がない部屋で体調を崩した。

福祉避難所は、雅子さんが相談した区役所窓口の紹介で、すぐ受け入れてもらった。

嶋田さんは塩釜市にある職場の断水が続く、徴収先の会社などの被災も相次いだことで、仕事がない状態になった。だが、「今は家族が優先」と、浩さんの手伝いで自宅の片付けに

通った。

「みんなでいつまでも暮らせるように」とバリアフリーで造った家は、1階に泥がたまり、床や壁に真っ黒にこびりつき、「すぐ住める状態ではない」。悟さん、房寿さんが通った施設も送迎サービス中止で、まだ受け入れ状態にはない。

利用できそうな福祉関係の制度も探した。国の「災害時要援護者の避難支援ガイドライン」はあるものの、主眼は避難誘導。災害弱者の生活再建を支える仕組みは未整備だ。

幸い、嶋田さんの職場は今年5日に再開した。一方で悟さんの体調は優れず、一時、医師や看護師がいる別の施設に移った。

しばらくは家族ばらばらな状況が続く。でも、決して諦めない。「悟の障害も家族で乗り越えてきた」。今度の試練も家族みんなで乗り越えるつもりだ。(佐久間緑)

【喪失 大震災から1カ月】

(上) 首都圏パニックは何だったのか 疑心暗鬼が「危機」起こす



産経新聞 2011年4月9日
売り切れでカラになった東京都心にある量販店のカップ
麺陳列棚＝11年3月14日(原田史郎撮影)

揺れが収まるのとほぼ同時に爆発音があった。千葉県市原市の金融機関に勤める桑折雅彦さん(27)は職場の外へ出ると、数キロ先にあるコスモ石油の巨大な液化石油ガスタンクが炎上し、爆風が全身を覆った。空へと燃え上がる黒煙…。あの瞬間、「何か大変なことが起きた」と悟った。

数日後、妻(27)と千葉市の自宅からスーパーへ走った。レジには行列ができていた。2リットル入り飲料水6箱(24本)、カセットコンロ用ボンベ15本、菓子パン10個、カップ麺5、6個を30分並んで買った。

「棚から持ち去られていく様子を見ていると、保存できるものは何でも買っておかなければという気になった。モノを少しでも手元に置いておきたかった」

東日本大震災後、被災地から数百キロ離れた首都圏で起きた食料品や日用品の買いだめ。ガソリンスタンドでも行列ができた。

消費者庁によると、関東圏向けのガソリンと軽油はすでに、3月21日から平年並みの出荷量へ戻っている。飲料水は放射性物質(放射能)の影響で依然として平時の8倍の需要があり品不足が続くものの、食料品は納豆やヨーグルトなど加工工場の被災や計画停電のため減産が続く食品を除き平常に戻りつつある。

桑折さん宅の冷蔵庫わきには、ペットボトルや保存食が山積みになっていた。

「妻と『正直、むだに買いすぎたかもしれない』と話すことはある。あれは一体何だったのだろうと思うこともある。われを失っていたのかもしれない」

供給増も追いつかず

首都圏の大手スーパーが震災5日後の3月16日、食料品と日用品30品目について需要と供給の状況を調べた。飲料水の需要は平時の31倍に上り、パスタは27倍、カップ麺は14倍、米は10倍。日用品ではボンベが30倍、乾電池が16倍だった。

一方で、供給も飲料水が2.5倍、パスタが3.6倍、カップ麺が2.7倍、米が2倍など大半が平時を上回った。もし、あのとき消費者が冷静に行動していれば、品不足が起きることはなかったといえる。

新潟青陵大学の碓井真史教授(51)＝社会心理学＝は「互いの疑心暗鬼から買いだめといった行動を取ってしまう。スーパーへ行くと品薄になるのではないかと感じ、さらに報道などの情報で裏づけられると、行動が行動を呼んでしまう。特に首都圏は人口が多いため、一部が動く連鎖が起きやすい」とし、こう続けた。

「そもそも、モノが作れなくなったわけではなく、わが国は生産力も備蓄もある。本当の危機ではないのに危機を起こしている」

同じ大手スーパーが今月4日に再び調査したところ、買いだめが一巡したため、米とカップめんの需要は震災前の3割減、2割減に落ち込んでいた。トイレットペーパーとティッシュペーパーも1割減だった。

ベランダへ戻る洗濯物

洗濯物がベランダの物干しざおに翻っていた。東京都中野区の高台にある一戸建てで暮らす主婦（36）は震災後、放射能から自衛するため洗濯物を屋内で干し、外出時は帽子とマスクを身につけていたが、3週間でやめた。

主婦は「あのときは新聞やテレビ、ブログ、ツイッター、ママ友の話…とさまざまな情報があふれ、何を信じていいのか分からなくなっていた」と振り返る。

東海道新幹線は当時、放射能を恐れ西へ自主避難する母子で「疎開列車」と化した。が、小学校や幼稚園の新学期をきっかけに多くが首都圏へ戻りつつある。

むろん東京電力福島第1原発の事故はいまなお危機的な状況が続いている。妻（29）と生後8カ月の長男が滋賀県の妻の実家へ避難する都内の会社員、内野太郎さん（32）は「目に見えない不安がある。子供のことを考えると危険は避けたい」と話す。

東京女子大学の広瀬弘忠元教授（68）＝災害・リスク心理学＝は「買いだめにせよ放射能からの避難にせよ、政府が『冷静な行動を』と呼びかけたことが意図とは逆に集団心理をあおった。こうした際に倫理的な呼びかけは逆効果なだけで、政府は買いだめや避難をしなくても大丈夫であることを裏づけるきちんとしたデータを示し、論理的に人々を安心させることが重要だった」と指摘する。



戦後65年間で最大の国難をもたらした東日本大震災。1カ月という時間を経て、われわれは今、どんな場所に立っているのだろうか。発生から1週間に続き、考えてみたい。

（中）被災地でなくてもストレス 「頑張れ」と言われても…

産経新聞 2011年4月10日

実際に被災したわけではないのに、気持ちが沈む。埼玉県の主婦、中村滋子さん（32）は東日本大震災以降、やり場のない抑鬱感を抱えて暮らしていた。

「震災後、牛乳や紙おむつがなくなり始めて焦り、計画停電のためどうやって生活をやりくりしようかと悩み、原発事故で当たり前になっていた空気や水への安心感が揺らいだ」

4歳と2歳、4カ月の3人の男児を育て、買いだめする人であふれるスーパーの行列にも並べなかった。夫（29）は食品工場に勤めており、計画停電のある日は生産ラインが止まるため休業になった。

中村さんは「家族の生活リズムも変わってしまったが、子供たちには不安な思いをさせたくないで平静を装った。それがまたストレスになった」と話す。

「ロビンソン」など数々のヒット曲で知られるバンド「スピッツ」は、ボーカルの草野マサムネさん（43）が3月17日に「急性ストレス障害」と診断され、4公演を見送った。

所属事務所は「体験したことのない大きな揺れや続く余震、想像を絶する被害、悲惨すぎる現実が連日報道され、また原発事故の深刻な状況などを感じ、目の当たりにし続けることで過度のストレスが急激に襲いかかった」と説明する。

門灯消えた住宅街

東京都内の企業で産業医を務める浜口伝博医師（52）＝産業保健＝によると、震災後、「被災地の映像が頭をよぎる」と訴え、血圧の上昇や微熱が続く患者が後を絶たないという。

浜口医師は「あれだけの映像を見続ければ衝撃を感じるのは当たり前だ。被災地に知人

がいなくても、日本人であれば身近に思い、つらく感じる」と話す。

計画停電で街の明かりが消えていることも抑鬱感を引き起こす要因になる。浜口医師は「北欧は冬の日照時間が短く『冬季鬱』になりやすい。東京の薄暗い地下鉄の構内や、明灯がすべて消えた住宅街を歩けば気がめいる。被災者のために何かをしたいのに何もできないという無力感も後押しする」とし、こう述べた。

「何もしないとどんどん落ち込むので、やはり体を動かすのがいい。そのためにはしっかり寝ること、食べることが重要になる」

スピッツの草野さんは快方へ向かっており、13日から公演を再開するという。

ふんどし一丁から

《みんなで頑張れば絶対に乗り越えられる。日本の力を、信じてる》

民放テレビで震災報道の合間に繰り返し放送されているACジャパン（旧公共広告機構）のCM。歌手のトータス松本さん（44）が呼びかけ続ける。

事務局によると、視聴者からは「元気が出た」「勇気づけられた」という反響の一方、「同じメッセージが繰り返され、気がめいる」「耳鳴りのように残る」といった制作意図とは異なる声も寄せられているという。被災地で「頑張れ」と声高に叫んでも、「こんなに頑張っているのに…」といった反応を示す被災者も少なくない。

フランス文学者で筑波大学の竹本忠雄名誉教授（78）は「大震災の被害そのものはいかに甚大、悲惨であろうとも日本人の忍耐と英知によって必ず克服されるだろう。外国の援助もあるだろう。だが、精神の立ち直りはわれわれ自身によってしかできない」とし、65年前の国難であった敗戦後の体験を話した。

「東京の下町は大空襲で焼け野原となった。みんなで神社を再建し祭りを行った。着る物もなくふんどし一丁の男たちが境内に勢ぞろいし、戦災孤児たちと黒山の人垣を作って氣勢を上げた。戦後の復興は紛れもなくあそこから始まった」

そのときの色あせた写真は、現在も社殿に誇らかに飾られているという。

（下）原発避難者たち 安心して住める場所どこに



産経新聞 2011年4月11日
午後2時46分、海へ向かい黙祷を捧げる園児たち＝11年4月11日、岩手県大船渡市のいのかわ保育園（宮川浩和撮影）

この1カ月で5回、避難先が変わった。東日本大震災で被災した東京電力福島第1原発から20キロ圏内の福島県楡葉町で塗装業を営んでいた松本勇一さん（56）一家は11日、5カ所目であるいわき市のアパートで震災1カ月を迎えた。

松本さんは「短いようで、長かった1カ月でした」と振り返った。

福島第2原発が立地する楡葉町の自宅は津波により2メートル近く床上浸水した。仕事道具は半分が流された。一家は、その後に原発事故の対応拠点となった「Jヴィレッジ」へ避難し、いわき市の親類宅、新潟県柏崎市にある柏崎刈羽原発の作業員宿舎、さらに長男の知人のつてを頼り空き家だった東京都西東京市の民家へと移った。10日にいわき市の2DKアパートを契約し、11日にかけて引っ越した。

松本さんは「東京の大家さんは『いつまでいてもらってもいい』と家賃なしで住まわせてくれ、近所の方々は米や食材から鍋、衣類、ふとんまで持ってきてくれた。本当に感謝している。でも、知らない土地でどうしても気持ちが休まらなかった。少しでも故郷に近いところへ戻りたかった」と話す。

ふるさと追われて

「浜通り」と呼ばれる福島県の太平洋岸、楡葉町など双葉郡8町村からの避難者は6万8千人を超える。多くは新潟や群馬など県外へ避難しており、楡葉町の場合、人口7800人の7割近くは県外で避難生活を送っている。放射性物質（放射能）から逃れてきた彼らは、宮城、岩手両県など大津波による被災者と異なり、復興どころか故郷へ帰るめどさえない。

楡葉町議で損害保険代理業の山田昭さん（58）は妻（57）を島根県の実家へ避難させ、いわき市にある私立大学の保養所で町議仲間と合宿している。

山田さんは「原発が産業のほぼ8割を占める町は、40年間の投資が一瞬で吹き飛んだ。それどころか放射能というマイナスを抱えてしまった。われわれは安住の地を失った。難民になった」と話し、こう訴えた。

「家がない、仕事がない、情報がない。先が見えないから不安が増幅され、立ち上がれない。完全でなくてもいい、うっすらとでもいい、生活の将来像を示してほしい」

日本史上初の経験

平成16年の新潟県中越地震で全村避難した旧山古志村（現長岡市）。村人は「山古志へ帰ろう」の合言葉のもと、避難指示の解除を待ち1年から3年かけて帰村を果たした。現在は485世帯1292人が暮らし、過疎の山村ながら世帯帰村率は70%を超える。

今月5日、双葉郡の8町村長らは東京都内で記者会見し「元の町へ戻りたい」「必ず帰ろう」とかつての山古志の人々と同じ言葉を口にした。だが、彼らの前には原発事故による放射能汚染が立ちのぼる。それはわれわれ日本人にとって歴史上初めての経験となる。

いわき市での避難生活を始めた松本さんの次女、秀美さん（27）の夫（25）は東電第1原発に勤め、1、2号機の運転員として震災後すでに3回、現場へ入った。6日勤務し3日休むローテーションが続いている。不十分な食事と睡眠のためにやせ、風邪をひいて帰ってくる夫の姿に、秀美さんは「待つことしかできない」と話す。

初めてのわが子がおなかの中にいる。

「戻りたいけれど、戻れたとしても子供のことを考えると心配になる。将来はどうなるのかと不安に思う」

やがて生まれくるわが子へ何を用意してあげたいか。秀美さんはひと言、こう答えた。

「安心して住める場所」

●体験や意見をお聞かせください

【あて先】 news@sankei.co.jp （都道府県か国名、年齢、性別をお書きください）

バリアフリー計画作成の市町村、15%どまり

日経新聞 2011年4月11日

高齢者や障害者が快適に生活できるようにする「バリアフリー計画」を作った自治体が、2010年3月時点で全体の15%に当たる260市町村にとどまっていることが、国土交通省のまとめでわかった。多くの市町村が「予算不足のため作成できない」としており、自治体の対応の遅れが浮き彫りになった。

国交省は06年にバリアフリー法を施行。病院や駅、バスターミナル、ショッピングセンターなどのバリアフリー化計画を作成するよう市町村に求めている。同省は今後、有識者や職員を自治体に派遣し、計画作成を支援する考えだ。

たまには太陽の子・手をつなぐ、たまにはつなぐちゃんベクトル、たまにブログたまにはチェック



大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行